

---

# 鬼神

せんとかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼神

### 【Nコード】

N4912Z

### 【作者名】

せんとくん

### 【あらすじ】

人を食らう巨大生物、激しい気候、貧しい文明。しかし、戦争はなかった。人と人との争いはなかった。

機械仕掛けの『鬼』が現れるまでは

## STORM

少年は死が迫ってくるのを感じた。

12、3歳ぐらいだろう。まだ幼さを残した顔は恐怖でひきつり、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている。少年は木の影にうずくまり、遊び半分でこの森に踏み込んだことを、ただただ後悔していた。後悔以外にできることがなかった。

背後からは地面に落ちた小枝が折れる乾いた音が、片時も途切れることなく聞こえてくる。そしてそれは確実に彼の方に近づきつつあった。徐々に大きくなる死神の足音に、彼は一層体を小さく丸め、汚れはつれた着物の端を握りしめた。すでに辺りは喧騒が支配している。何かが這いずる音以外、何も聞こえない。

突然、少年の全身に衝撃が走った。全身が硬直し、一瞬思考が停止する。振り向いて、彼は危うく意識を手放しそうになった。彼が身を隠していた大木に、クワガタのような大顎が突き立てられている。それは万力のように徐々に、しかし力を緩めることなく木を締め上げてゆく。数秒後、断末魔の悲鳴とともに少年を守る唯一の砦はへし折れた。

それはまさしく怪物であった。ぬらぬらと黒光りする甲殻、せわしなく動き続ける無数の足、毒々しい朱色の頭。ムカデ。姿こそ地べたを這いずり、人に踏みつぶされる虫けらと変わらない。違いはその5メートルはあろうかという巨躯のみだ。ただそれだけの要因で人と虫との立場は入れ替わる。人は殺され、食らわれる。

少年は自分の下半身が生暖かい液体で濡れるのを感じた。腰が抜け、逃げることもままならない。彼は断頭台に立つ罪人となんら変わりなかった。ギロチンが振り下ろされるまで、泣いて祈ることしか許されない。

突如、爆音とともに大ムカデは吹っ飛び、地面に転がった。べたべたとした体液が辺りに飛び散る。ムカデの胴体は中ほどから千切れ飛んでいた。頑強な甲殻は無残に焼け焦げ、中身がむき出しになっている。事態を全く呑み込めていない少年が次に見た者は、茂みから飛び出した巨人だった。

## V I O L E N C E

「……ガキ？」

戸惑うような声は巨人から発せられたものだ。少しエコーがかかったそれは、意外にも女性のものだった。

少年はこの混乱の原因となった乱入者をまじまじと見つめた。巨人の身長は4、5メートルはあるだろう。あんなに巨大なムカデが小さく見えさえする迫力だ。その外観は、およそ生物とは言い難いものであった。巨人は金属でできている。全身は黒く、飾り気がない、武骨な意匠だ。全体的に見ればスマートなフォルムだが、その手足は丸太ほどの太さがある。頭部は小さめで、顔の真ん中に球体が一つあった。おそらく目なのだろう。

両手には巨人の身の丈と同じか、それ以上の長さを持つライフルが構えられていた。ライフルといえども、大きさが大きさである。その威力は推して知るべし。大砲にも等しい口径をもつ銃口からは、もうもうと硝煙が立ち上っていた。

「なぜ」

巨人の単眼モノアイが動き、少年を視界の中心にとらえる。少年は固まったままだ。

「話せるか、ガキ」

「っ……！」

首をブンブンと縦に振る。目の前にいる相手と会話できるという事実が、少年をいくらか落ち着かせた。理性も何もない化物を相手にするよりは、いくらかマシといえるだろう。しかし、彼のわずかな安堵は目の端に映った光景によって瞬時に消え去った。

半身を吹き飛ばされた大ムカデが、いまだうごめき、巨人を睨んでいる。ムカデは残る半身を折り曲げ、巨人の首を食いちぎらんと跳びかかった。

「あぶなっ……！」

「しつこい」

巨人は決死の奇襲を意にも介さず、無造作に発砲した。人の握りこぶしほどもある弾丸が空中で命中し、大ムカデの体が爆裂、四散する。杭のような脚が地面に突き刺さり、巨大な頭が弾け飛ぶ。

飛び散った体液が口の中に入って少年がむせていると、すぐそばに何か大きく、重たいものが降ってきた。それがもぞもぞと動くのを見て彼は小さく悲鳴を上げる。それは大ムカデの頭部だった。長い触角は千切れ、大あごは弱弱しく開いたり、閉じたりを繰り返している。

巨人は面倒くさそうに、ライフルの銃床じゅうしゆどを使い、それを打ちつづした。赤い甲殻がかち割れ、地面にめり込む。おそらくこの森の主であろう大ムカデの生涯は、たった数秒の争いで幕を閉じた。

少年にとって目下の脅威は消えた。だがしかし、安心する暇などない。目の前には正体不明の鉄でできた巨人。こんなものは見たことも聞いたこともない。先ほど会話ができることはわかったが、どう見ても人間には見えない。敵か味方かもはっきりしない、とあつてはどうしようもない。

「質問に答えろ」

「ひつ」

冷やかな声とともに、銃口が少年に向けられる。あの大ムカデすら、たやすく吹き飛ばす代物だ。撃たれば骨ですら、粉となつて消えるだろう。

「時間がねえ。今からいくつか質問をする。はいか、いいえかで答えろ。てめえの質問は受け付けない。わかったか？」

「は、はいっ！」

巨人が銃をおろさずに問う。逆らえば殺されるであろうことを少年は感じ取っていた。彼女（？）が少年を助けるために現れたヒーローなどではない、ということは確定的に明らかである。現に今自分は銃を向けられているのだ。

「てめえは地上で生まれた。はいか、いいえか？」

「……？ はい」

少し疑問を持ちつつ少年は答えた。意図を測りかねる質問だ。地上でなければどこで生まれるのだ。まさか土の中で生まれる人間などいるまい。

「つぎ。てめえ以外に人間はいる。はいか、いいえか」

「うん。おれは近くの村からきて、そこにはおとうもおかあも…

…」

銃口がずい、と突き出され、少年がのけぞる。

「はいかいいえかで答えろ。無駄口はたたくな」

「ひあつ！ ひゃい！」

恐怖のせいか口がうまく回っていない。涙と鼻水はふたたび流れだし、顔をふやけさせる。

「てめえらは、あたしらのことを知っている。はいか、いいえか」

「いいえつ、しりまひえん！」

「そうかい、んじゃ次はつと……チツ、時間か」

巨人はいまいましたげに銃をおろすと、少年に背を向けた。背中のバーニアが火を噴く。突然熱風にあてられ、少年はおもわず顔を手でおおった。

「じゃあなシヨンベン小僧。ボサツとしてると食われるぞ」

轟音が鳴り響く間、少年は目を開けることができなかった。目を開けるとすでにそこには巨人の姿はない。あれは夢だったのか。そう思い傍らに目をやる。すぐ隣にある、地面にめり込んだ虫の頭がその考えを打ち消した。

（ボサツとしてると食われるぞ）

数秒前、自分にかけられた言葉が頭の中で再生されると同時に、少年は我に振り返り出した。



## GROWTH

うつそうと草木が生い茂る森の中を、1人の青年が歩いている。

緑と茶色ばかりの空間の中で、男の存在はひどく浮いていた。身長190センチはあろうかという大男だ。上半身は裸にさらしを巻いたのみで、その鍛え上げられた肉体を惜しげもなくさらしている。背にからっているものはおそらく刃物だろう。革製のさやにつつまれた刀身はかなり長く、肉厚である。ゆつたりとした真つ赤なズボンを穿き、腰の帯には、2本の水筒と、木製の小物入れが括り付けられていた。

眉は太く、目つきが鋭い。がっちりとしたあごで、口の端からは牙のような犬歯が覗いている。短めに切られた髪の毛は頑固に逆立ち、天を指していた。顔や体は傷だらけで、とりわけ大きい傷が額にあった。

何もしなければ、野性味あふれる凶悪な顔つきなのだが。アホ面で鼻をほじっていては全部台無しである。

森の中は巨大昆虫のテリトリーだ。岩のように固い甲殻、大木をもなぎ倒す爪、それに加えて毒をもつものまでいる。虫は森の生態系の頂上に君臨していた。

虫たちにとってほかの動物はすべて餌だ。むろん、人間とて例外ではない。そんな彼らの縄張りに生身でずけずけと入り込むのは、自殺行為といっても過言ではない。出会ったが最後、殺され、噛み砕かれ、彼らの胃の中に納まるということとはわかりきっている。

それにも関わらず、男の態度はじつにのんきなものだった。ここに凶悪な捕食者<sup>ハンター</sup>が潜んでいるかわからない危険地帯を、鼻歌交じりに堂々と腕組みしながら歩いている。よほど自分の力に自信があるのか、それとも全く状況をわかっていない愚か者か。

不意に、木の陰から何かが飛び出し、青年に襲いかかった。彼の

緩んでいた顔が引き締まる。彼は後ろに飛びのいて、華麗に攻撃をかわし

木の根につまずき無様にコケた。

「ぬ、うつつうつつうつつうん!!」

絶叫しながら頭を抑え、のた打ち回る大男。ただのバカでなかったにしろ、バカであることには変わりないようだ。

大声に一瞬襲撃者がひるむ。跳びかかってきたのは巨大なカマキリだった。全身緑色で細身の体躯。その体長は青年に勝るとも劣らない。前足の代わりの大鎌は、およそ自然界のものとは思えない禍々しいフォルムだ。

「な、なかなかやるじゃねえか、虫けら」

啖呵を切りつつ立ち上がるが、涙目で言われてもいまいち締まらない。

カマキリが羽を大きく広げ、威嚇のポーズをとった。鎌は閉じられ、胸の前に構えられている。臨戦態勢だ。

それを見て、青年の眼光に鋭さが戻る。彼は右肩にある柄を握り、武器を引き抜いた。それは巨大な蛇のように見える。刀身は逆反りで、切っ先は出刃包丁のようにつぶれていた。刃渡りは1メートルほどだろうか。刃幅は30センチほど。重量感のあるそれは刃物でありながら、鈍器のようにも見える。

彼は得物を右肩に担ぐように構えた。八相の構え。剣を振り下ろすことだけに特化した攻めの構えである。初手に必殺の一撃を打てるが、それをかわされたならば死あるのみ、という恐ろしく極端な構えだ。

対するカマキリは待ち伏せを得意とする。射程内に獲物が飛び込んできた瞬間、目にも止まらぬ速さで折りたたまれた鎌を伸ばし、捕えるのだ。真正面から突っ込んでくるものは格好の餌食である。もつとも、こんな怪物に真っ向から跳びかかる馬鹿が

「うっっしゃあああああああ!!」

ここにいた。彼は何のためらいもなく、一步のもとに間合いを詰める。カマキリは瞬時に反応し、鎌をふるった。伸ばされた鎌は鉈よりもはるかに長い。このままでは彼がカマキリを両断するよりも早く、カマキリが彼を抑え込むだろう。しかしそうはならなかった。「おるああ!!」

青年が渾身の力で鉈を振り下す。武骨な金属塊が、左足の太鎌と空中でかち合い、へし折った。その勢いを緩めることなく、右足の太鎌ともぶつかり、弾き飛ばす。男を捕えるはずだった鎌は空を切った。

カマキリが金切声かなきりこえを上げ、わずかに後ろに下がった。その隙を逃さず、男は踏み込み、鉈を返して逆袈裟に切り上げる。刃はカマキリの首をとらえ、その胴体から頭を切り飛ばした。

ドサツ、という音とともにカマキリの頭が地面に落ちる。決着はついた。

鎌を碎かれ、首をはねられてなおカマキリは生きている。首を無くした程度で虫は死にはしない。しかし、目も口もない状態では生きていくことはおろか、戦うことなどできないに決まっている。

カマキリはあらぬ方向に向かって威嚇をしている。青年は自分の鉈を見て顔をしかめ、それを鞘に納めた。彼は片方の水筒のふたを開けると、その中身をカマキリに振りかけた。黒い液体がカマキリを濡らす。次に彼は腰に下げた小物入れから小さな玉を取り出し、カマキリに投げつけた。

玉はカマキリに当たって弾け火花を散らし、それは瞬く間に炎に成長してカマキリを包み込む。数秒後、体の大部分を炭にして、カマキリは死んだ。男はまだ動くカマキリの頭をボールのように蹴りながら、来た道を引き返していった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4912z/>

---

鬼神

2012年1月13日14時49分発行